面白くてためになる　パネルディスカッション「ロータリー精神に学ぶ　私の生き方とロータリー」

パネリスト　ＲＩ研修リーダー　岡本　徳彌（川崎北ＲＣ）
〃　南園　義一（防府ＲＣ）
ＲＩ指導力養成・研修委員
田中　作次（八潮ＲＣ）
コーディネーター　ガバナー　高橋　福八

パネリストプロフィール

田中　作次

生年月日　1939年２月４日
職歴　1996年　ダイカ株式会社　代表取締役会長
業界役歴　1996年～東京紙商家庭紙同業会　理事長
1996年～全国家庭紙同業会連合会　理事長
1998年～八潮市商工会　副会長
ロータリー歴　1994年　ＲＩ第2770地区ガバナー
1996年　ＲＩ第2790地区地区大会ＲＩ会長代理
1997年　ＲＩ1997年国際協議会トレーニング・リーダー
1999年　ＲＩ第2740地区地区大会　ＲＩ会長代理
1999～01年　ＲＩ指導力養成・研修委員会委員
モデレーター　2000年6月　ブェノスアイレス国際大会場にてShort Speach

岡本　徳彌

生年月日　1927年11月23日
学歴　1990年慶應義塾大学経済学部卒業
職歴　株式会社さいか屋　相談役
相模運輸倉庫株式会社　代表取締役会長
公職　川崎商工会議所　副会頭
川崎市光りのイベント実行委員会　委員長
川崎市合唱連盟　会長
慶應義塾川崎三田会　会長
ロータリー歴　1997～98年　第2590地区ガバナー
2000～01年　国際協議会研修リーダー
2000～01年　コーディネーター

南園　義一

生年月日　1929年12月１日
学歴　1955年　千葉大学医学部卒業
職歴　1962年　千葉大学医学部文部教官
1979年　財団法人防府消化器病センター防府胃腸病院長
1998年　財団法人防府消化器病センター理事長
団体歴　防府医師会長
防府市国際交流団体連絡協議会会長
学会関係　日本外科学会　認定医・指導医
ロータリー歴　1997～98年　ＲＩ第2710地区ガバナー
2000～01年　国際協議会研修リーダー
2001～03年　ロータリー財団ＲＲＦＣ

コーディネーター　高橋福八

時間もございませんので、すぐ始めたいと思いますが、先ほどは「白浪五人男」いかがだったでしょうか。練習のときにはあんなにうまくなかったのですよ。大丈夫かなと思ったら「馬子にも衣装」ですね。衣装を着けましたらすっかり役者になってしまいました。今回は衣装はございませんで背広でやりますので、全く地で行っていただきたいと思います。

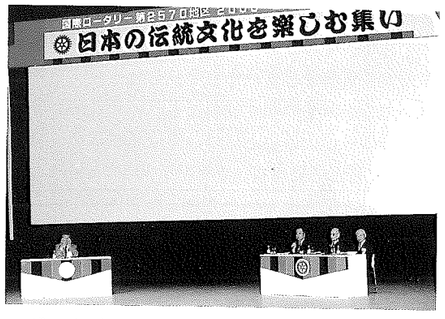
実は「ロータリー精神に学ぶ私の生き方とロータリー」。できるだけ面白いパネルディスカッションにしたいと思いまして、あまり形式張らずに自分とロータリーとのかかわりという体験談を話していただきたいということをお願い申し上げました。最初にお話をいただく岡本さんと南園さんは昨年２月にアナハイムで私たちガバナーを教育していただいた大先生で恩人でございます。それから、田中作次先生は、現在、ＲＩの指導力養成・研修委員でございますけれども、この方はそのお二人を研修した先生でございまして、この３人が揃いますとロータリーは何ぞやということがすべてわかるのではないかと思いましてお招きしたわけでございます。岡本さんは川崎、田中さんはお隣の八潮ですが、南園さんには防府という飛行機でなくては来られない所から来ていただきました。本当にありがとうございました。ご多用のところ恐れ入ります。

それでは、早速、岡本さんに「ロータリー精神に学ぶ私の生き方とロータリー」ということでお話をお願いいたします。岡本さんは有名な川崎の「さいか屋」というデパートの経営者でございまして、司馬遼太郎の「尻啖え孫市」という本がございますが、あの雑賀孫市の子孫とのことです。皆様ご承知のとおりこの方は、時の権力者織田信長にたてついたという気骨のある男でございます。岡本さんはその子孫でございますから、大変気骨もあるし根性もあるということで、早速雑賀孫市の子孫の方に最初にお願いいたしたいと思います。よろしくどうぞ。

パネリスト　岡本徳彌

今ご紹介をいただきました川崎北ロータリークラブから参りました岡本でございます。今日はこの立派な地区大会にパネリストとして呼んでいただきまして、高橋ガバナー、本当にありがとうございます。光栄でございます。また、今日は高橋さんの同期のガバナーの方が各地からたくさんこの席にいらっしゃいます。

私も南園さんも昨年２月アナハイムでご一緒いたしましたし、その前に東京でしたか、２回ご一緒に勉強会をいたしましてアナハイムへ行ったわけでございますけれども、そのガバナーの皆さん方が昨年７月から活動を始められまして、時折お便りをいただく。ガバナー月信を送っていただく。そして、地区大会等にお招きいただきまして、全部出席というわけにはまいりませんけれども伺ったり、また、ある地区にはＲＩ会長代理という大変光栄な役目を承って参上したり、また、今日のようなシンポジウムのパネリストとしてお呼びいただいたり、こういう形で文書ばかりでなくて現場で各ガバナーさんが大変な成績を挙げておられる姿を目の当たりにすることができまして、ほんのわずかでございますけれども、最後の仕上げのお手伝いをした私どもにとりましては大変嬉しい限りでございまして、こういう席で皆さんにお会いできたことを大変嬉しく思っているところでございます。本当にありがとうございました。



ざっくばらんにやれということで、どこまでざっくばらんにしていいかちょっとわからないのですけれども、私も実業人でございまして、別にロータリーの研究家でもございません。ただ、実践家として今まで36年やってきたわけでございますけれども、考えまして、なぜロータリーに入ったのだろうか、なぜロータリーに入るのだろうか。こういうことから入っていきたいと思うのですけれども、ロータリーには魅力があるから。何の魅力があるのだろうか。

そういうふうに考えてまいりますと、特に私の場合、個人的で申しわけないのですが、私はもともと同じ神奈川県でも横須賀市の出身でございま

して、先ほどご紹介がありました小沢ガバナーがお見えでございますけれども、そこから40年ほど前に川崎市へ百貨店の進出をいたしました。それで東京の百貨店、横浜の百貨店とが激烈な競争をするわけでございますけれども、そういう中でどうしても地元で根を下ろしたい。当然でございます。地元の方に知っていただきたい。それは、会社とすれば宣伝をしご招待をし、いろいろなことをいたしますけれども、それだけではなかなか地域の人に認めていただけません。出稼ぎだとか、そういうような形でございましたので、ぜひ地元のロータリークラブに入れていただきたい、こう思っておりましたけれども、最初のうちはなかなか自分自身が忙しくて、その気持ちになれませんでした。

実は、私の父親は戦後神奈川県でロータリークラブを３番目につくりました横須賀ロータリークラブのチャーターメンバーでございまして、ちょうど高橋さんの昨日の話にございましたお父さんと同じように商工会議所会頭だとか市長だとか衆議院議員だとか、そういうことをいたしました関係で、横須賀クラブ創立の初代の会長でございました。

そして、そのころは、ちょうど50年前で、すべて規則が英語でございまして、それを訳せと言われたことがあるのですけれども、いずれにしてもロータリーに入ることについては抵抗は全くありません。私なりにもロータリアンでございました。そんなことで入れていただきまして地域でいろいろの職業の方、いろいろの職業を代表する先輩方と知り合うことによって我々自身も非常に自分自身も知っていただく、こういうことで魅力を感じておりました。

おかげさまで、いろいろ友達をつくり知り合いを増やして、そのおかげ等もございまして社業も結果的には進展することができました。そして、私も地域の奉仕活動でいろいろ分担させていただいたわけでございますけれども、その基本は、クラブの中には先輩方で明治生まれの方などは非常に堅くお考えになっていて、何かロータリーというのは「みそぎの場」、１週間に一遍みそぎだ、こういうようなことをおっしゃる方もいました。

私などはそれに対して反発をしておりました。冗談じゃない、ロータリーは軍隊じゃないし宗教団体じゃないのだ。自分が一生懸命自分の職業奉仕をやりながら、そして自分の社業を生かしながら、お得意さんにも仕入先にもそして従業員にも株主にも一生懸命働いて働きながら地域に奉仕をするのだ。私たちはロータリーで食べているのではないのだということで随分論争いたしました。生意気なことを言うなということで随分言われて怒られましたけれども、私はそれで通しました。そして、やはり価値観が多少違うわけですけれども、奉仕をしよう、友達になろう、お役に立とうという意味での価値観を共有いたしまして、寛容の精神で仲のいい友達がたくさんできたわけでございます。

中には定款細則を、それがすべてのロータリーであるというふうに考えておられた先輩もおりました。例会に行くと定款だとか細則のことで食事をしながら言われて、こんな難しいことばかり言っていたのでは私はとてもロータリーに入っていられないなと思って何回かやめようかと思ったこともあります。けれども、それぞれ立場があるので辛抱しておりましたら、だんだんそういう方も言わなくなってしまった。

私が一番ロータリーに入ってよかったと思うのはこういうことがございました。まだ私が自分のクラブの会長になる前、幹事もやっていなかったと思うのですけれども、どういうわけだか先輩が「今度、研究グループ交換というのができたのだ、それの委員会をつくるから君は地区の委員になってくれ」こう言われまして、私ども川崎と横浜と一体になっておりますので横浜へ参りました。横浜へ委員会の10人くらいで参りましたけれども、その委員会の方々が非常に皆さん立派な方で私も下働きをやり、そして何年か後にはＧＳＥの委員長をやりまして、オーストラリアからチームを受け入れました。

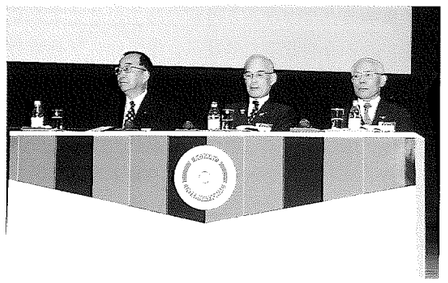
その中で国際性というものを非常に感じたのですが、オーストラリアのチームの中に数学の研究者がおりまして、今みたいにファックスがなくて手紙で来るのですが、ロンドンの数学の学会のときに東大の何とかという有名な先生、防衛大学の何とかという先生、慶応義塾の工学部の何とかという先生の論文も読んだし発表も聞いた。せっかく日本に行くのだからぜひ会いたい、アレンジしてくれ、そう言われまして、私はどうもその辺のことはよくわからないので、特に東大の先生なんてとても我々がお会いしたりお話しできる相手ではないと思って、恐るおそる東大へ電話したのです。

しばらく待ったらつながりまして、恐るおそる「実は私は川崎北ロータリークラブの岡本です。そして、こういうわけでオーストラリアからＧＳＥのチームが来ます。その中に先生に会いたがっている研究者がいるのですが、先生、お忙しいと思うのですけれどもお時間を割いてお会いいただけますでしょうか」、こう言いましたところ、先生が「なに、ロータリー」と大きな声で言うのですね。これは駄目だ、こう思いましたら逆に、「ロータリーか、ロータリーなら会うよ」こういうことなのです。

私はびっくりいたしましてね。先生、どうしてですかと聞いたら、実は僕は年齢でおかげを受けていないけれども、自分の助教授、それから講師、その他自分の教室の自分より若い者がロータリー財団奨学生で戦後アメリカへ何人か行っている。それが今帰ってきて各大学で講師になったり教授になったりしているし、東大にもいるのだ。ロータリーのありがたさは本当に骨身に沁みてわかっている。これによって戦争中に遅れている日本の数学の研究が瞬く間に追いつくようになった。場合によっては追い抜くのだ、こういうところまで来たのだ。これはロータリーのおかげだ。ぜひ会う。あなたもいらっしゃい。そして、都内に散らばっているロータリーの親善奨学生を集めるから会って議論しよう。昼食会をしよう。こういうお話でございました。

私は、びっくりいたしまして、ロータリーの国際性、頭の中ではわかっておりましたけれども、今から30年くらい前の話ですけれども、そんなことを痛感いたしました。これはロータリーはやりがいがあるな、それまでクラブで先ほど言いましたような定款・細則だとか、そんなことばかり言っている人が何人かいまして、いつも痛めつけられておりましたので悩んでおりましたけれども、これはすごい組織だ、これならやろうじゃないか、こういうふうに思ったわけでございます。

また、青少年交換で君の家で預かれよというようなことで預かりまして、その後、これも30年くらい行ったり来たりして、そこのお家と親戚同様になっている。そんなこともございまして、もう私の息子や娘、またその子供たち、私にすると孫でございますけれども、それが先方の青少年交換



でご縁のできたアメリカ人の家へ行ったり来たり、向こうからも来ております。そんなような経験が私のロータリーの非常にいい思いでやる気を起こした要因でございます。

もちろん、先ほどから何遍も言っていますように定款・細則、これは規則でございますから必要でございます。また、出席も必要でございます。出席しなければ知り合いができません。そうかと言って、病気になって入院した人まで出席しろと言った時代がございます。これは各地でございました。何とか100％で競争していた時代、私から言えば非常識の時代でありますけれども、今はそんなことはございません。理由があれば休むのも仕方がない。こういう時代でございますし、ロータリーも数が増えましたから、しかもメーキャップも２週間ということになりましたから非常にメーキャップもしやすくなっております。私の父親の時代などはもう本当に100％、100％で大変苦しんでおりました。そんなことで、常識に戻っていると思っております。

これからロータリーは21世紀に入ってまいりまして、どういう方向に行くのだろうか。先ほど来、お話がございましたように、最初は個人奉仕から始まって団体奉仕、それも熾烈な議論がございまして、それが個人奉仕も団体奉仕もするのだ、人のために役立つこともありニーズがあればそれをやるのだ、こういうことで動いておりまして、我々実務におります人間としては非常にわかりよくなってまいりました。

ポリオプラスを2005年に終える。あるいは、その他今後どうなるのであろうか。東西対立は終わりましたけれども、まだ南北問題で非常に厳しいアフリカだとか東南アジア、あるいは中近東、あるいは旧の共産諸国において非常に厳しい暮らしをしている人がいる。そこにはまだまだ言論の自由もなければ集会の自由もない国もある。民族の

対立もある。先ほどからお話ししておりますポリオという一つの病気の問題は、世界のＷＨＯであるとか他の団体との協力で解決する段階に来ておりますが、これからその後どうなるのか。

世界には全く字の読めない、算数もできない人が９億人もいる。これに対して我々単独で、あるいは場合によっては他の機関と一緒になってその人たちの生活を向上させることが必要だろうと思います。従来ロータリーは決してお金を与えるようなプロジェクトを主にやっておりません。すべて自助努力を助けるというようなことをやっておりますが、これからもその方向に行くのだろうと思います。

また、私どもの先進国と申しますか、戦後皆さんの努力でここまで回復し成長してきた豊かな社会でも、逆に豊かさゆえのいろいろ問題がございます。青少年教育の問題であるとか、あるいは都心の荒廃の問題等がございます。そういうものに対してロータリー財団等も目を向けまして、地域のキャップという、従来はロータリー財団のお金は国際的に使うのでしたけれども、今回からは地域にもＤＤＦが使えるということになってきております。社会にいろいろ問題がある。

それを見つけ出してそれを解決するように、今年のデブリンさんのCreat Awareness Take Action.問題を今まで見つけられなかった、見ても見過ごした、あるいは大したことないということでやらなかったことがいろいろあるわけですから、それを各地のロータリーが地域に足を下ろしてやっていく必要があるのでないか。また、それが２１世紀につながる道だろうと思います。そのためにはやはりロータリークラブが活性化していなくてはいけない。

先ほどガバナーがおっしゃっておられましたけれども、やはり１年経てばロータリーは１年ずつ平均年齢が上がってまいります。平均年齢が上がることは結構なのですけれども若さ、エネルギーが減ってくる。あるいは、新しい価値観を持った人が入ってこない。女性を含めて新しい会員をどんどん入れないとロータリークラブの活性、エネルギーがなくなってくる。これはもう歴史の示すとおりでございます。また、経済社会がどんどん変わってまいりますと価値観が変わってまいります。私どものようにもう70を超えている人間の価値観と40代、50代の人たちの価値観は全く違います。また、忙しさも違います。

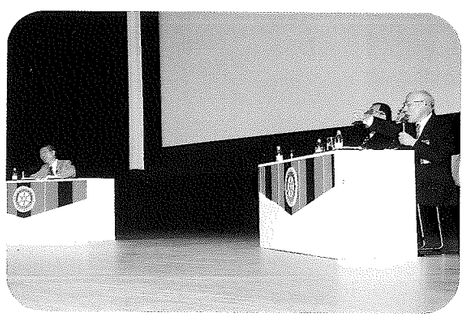
ＩＴ革命で、あるいは輸送革命で世界が一瞬にしてつながっている。こういうような社会になってまいりましたので新しい人をたくさん入れる。そして、クラブを増やしていく、充実していくということが必要であり、何をやるにしてもお金がかかるわけですから、ロータリー財団に対する我々の引き続いた貢献度、あるいは米山奨学会に対する貢献というものが絶対必要であろう、こういうふうに思うわけでございます。

堅い話ばかりになって申しわけありませんけれども、後で地が出ると思いますからこの辺で第１回を終わりたいと思います。

コーディネーター　高橋福八

とてもいい話ですので、10分と言うのを私はうっかりしてしまいました。お話を聞いていれば２時間でも３時間でもいいのですけれども、基本的に10分程度でお話をしていただいた後でまた足りないところを付け加えていただきます。我々実業人というのはすぐ実相が見えてしまうのです。形式化、形骸化したことを言っても本当のことがすぐわかってしまいますから、私はそういう意味ではロータリーはおかしいと思っておりました。私の発言が変わっているとしたら私自身がロータリアンとしての異端児ではないかと疑念を持ってしまいました。

ところが、アナハイムへ行って岡本さんの話を聞いたら、岡本さんも実業人ですから、よくわかるのですね。ああ、自分は異端児ではないのだ。本当のロータリアンだということがわかったのです。それで、自信を持って私の考えが本当のロータリーの考えだと思って発言してきたのです。ですから、反論する人がいるとまだロータリーに対する正しい理解に至っていない人だなと思うので



すよね。それは岡本さんのおかげなのです。ありがとうございました。

さて、南園さんは大病院の経営者でございまして、山口の方へ行ったらそばへ寄れないのではないかと思っているのですが、非常に紳士で本当にわかりやすく解説をしていただきました。10分前後で何でも結構ですからロータリーと私ということでお話をしていただきたいと思います。

パネリスト　南園義一

昨日から今日にかけて高橋ガバナーの熱意とエネルギーには私は全く圧倒されました。こんなにすばらしい人がいたのかなと実は思ったのですが、アナハイムで１週間過ごしているうちに、ある日、高橋さんが私に言うのです。来年は私、地区大会をやりますから、ぜひ来てください。もうそのときに約束をさせられまして、それが今日やっと実現したという次第でございまして、さすがに彼が21世紀のロータリーということを考えて、本当にこれからやらなければならないのは熱意だということを、身を持って示してくれたのだろうと思うのです。美辞麗句はもう結構だ、やろうじゃないかというところにまで私は来ているという感じを持っております。

ロータリーには、さっき岡本さんも言いましたけれども、定款・細則は一応ございます。規定審議会が今やっと終了していろいろ報告を受けておりますけれども、実際には根源にあるものは何かということですね。私は医者でございますので、昔から医者として実際に仕事をしている中で、患者さんに対して一体私がどの程度のことが、どういうふうにしたら本当に満足をして差し上げられるかということを日ごろから考えてきました。しかも、医療というのは社会性がなくてはならないということも日ごろからの私の大きなテーマでございました。しかし、残念ながら私は医者としては失格でございました。昔いろいろなことをやりましたけれども、ひとりよがりで自己中心的な発想からの医療をやってきたなということを日ごろ考えております。

しかしながら、ちょうど私がロータリーに入った1978年でございます。いろいろないきさつもございましたけれどもロータリアンになってよかったなと今つくづく思うのは、単に言葉ではなくてお互いが触れ合うことができるというこの嬉しさですね。この味わいは皆さんが本当にロータリーがおわかりになってくると、感じられるのではないかなと思っております。

私がロータリークラブの会長をやらせていただいたのが1991年でございますが、ガバナーをやったのは1997年なのです。ガバナーのときに私が一番のポイントとして考えたのはそういう一つの優しさと熱意、熱意を持ってロータリーを語ろうよ、ロータリーを味わおうよというのが私のテーマでございました。最終の地区大会の懇親会のときに野原でやろうと。私は山口ですから毛利様の庭園を貸してくれと言いましたら「貸さない」と言われました。庭を傷めるから貸しません。それをロータリーのために貸してください。その熱意で、やっと貸しましょう。そして、保安林もあるけれども大丈夫かと言われましたが、それも大丈夫、責任を持ちますと答えました。

その晩、会長代理は紫野さんでございましたけれども、2,000人の大パーティーをやりました。10月ですから空には月が煌々とちょうど満月に近い月がかかっておりまして、秋の多少肌寒い中で皆さんと一緒にロータリーを語ったのですね。その感激を私は今でも忘れられないのです。みんなと一緒になっていろいろなアトラクションよりも、心と心で語り合うことも大事なのですね。ですから、そういう意味では私は本当にいい経験をさせてもらった。そのころからロータリーというのはこういう良さがあるのかというものを本当に感じるようになりました。ですから、ロータリーの根源にあるものは人間の味わいなのだと私は思うのですよ。

リチャード・キングさんという来年のＲＩ会長が、あなたはなぜロータリアンになるのかという20の項目を挙げていらっしゃるのですね。その第一に挙げたものは友情、フレンドシップです。これが一番ロータリーの根源だということですね。そして、もう一つは個人的な成長、発展なのですね。自分が自己開発をしていくというのがロータリーの持っている一番のよさであろう、そういうことを言っておられますし、それからだんだんと触れ合っていく中でリーダーシップというものがわかってくる。リーダーシップとは何かということがロータリーでは学べますよ。それがまた大きなポイントですね。

それから、もう一つは地域社会のよき市民とな

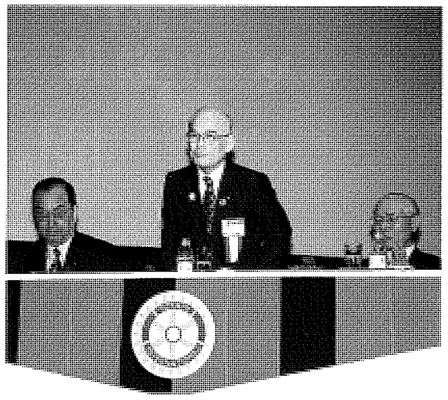
ることができますよ。ロータリーに入ったら、もう一つ国際的な世界的な市民として通用するようになりますよ。この五つがリチャードさんの言った20の項目、たくさんございますけれども、私は一番のポイントはここにあると思うのですよ。そういうことの中から一つのロータリーの特徴というものをしっかりと我々がつかんで、そして目標はきちっとけじめをつけて努力を続けていくということが大事だと思うのですね。もうこれから先は、なぜどうしなければならないのかということよりも、何をすべきかという段階に入っていると思うのです。

ところが、奉仕活動でも何でも、何をしましょう、こういう方法でしましょうという論議がなかなか進みません。例えば社会のニーズということが言われますけれども、一体ニーズとは何なのだ、どうしたら我々はそれを知ることができるのか、どうしたらそれを解決できるのかというその次の論議をしなければいけない段階です。そうしなければ、ロータリーが地域社会や国際社会の中で、いい意味でそれが理解され発展されていかない。そういう問題が私は一つあろうかと思います。ですから、次の指導者の方々、ロータリアンの皆さんもぜひ「なぜ」、「どうして」というところの切り込みの論議をしていただきたいと思います。

もう一つ、最後に言っておきますけれどもロータリーで持っている国際性です。これはすばらしいと思います。私も外国でいろいろな方々と接するたびに各文化そして民族、風俗、言語、そういうものが違っていても根源は一つだと思うのですね。だけれども、実際問題として我々が、例えばアメリカの文明と日本の文明、文化と言ってもいいですが、アメリカの文化と日本の文化をどうロータリーの中で調和させていくのか。ヨーロッパ的な考え方とアジア的な考え方をロータリーの中でどう調和させていくのか。そういうことがこれからの21世紀にはやはり大きな課題になるだろうと思っています。

ですから、そういうものをこれからのロータリアンの皆さんが国際性とは何かということをもう少し切り込んで考える。そして、対立するのではなくて、お互いに共生して、理解して、調和していく段階でどうしたらそういうシステムや方法がとれるのか。そういうことをぜひ考えていただきたいと思っております。そういうふうにして考えていけば私は将来のロータリーというものは必ず存在価値があり、そして、なおかついろいろな意味で社会の一つの大きな要求にこたえられる大きな組織だと。そして、我々の生き方そのものもその中で満足して充足ができる。しかも、社会をよくすることができる。国際的にもいい意味での世界平和でつなぐことができる。そういう意味でロータリーしかないのではないかという気を持っております。

ぜひそういう意味で皆様にご理解とご努力をお願いしたいと思っております。終わります。



コーディネーター　高橋福八

ありがとうございました。私も、今、思い出しますと２月に南園さんにわからなければすぐ手を挙げて、これはどういうことですかと知らないことは質問しました。私は主義として人に聞くより、いい知恵はないと思っているのです。知らないことは少しも恥ずかしいことだと思わない。勉強していないのだから。でも、知らないのに知ったかぶりをするのは、こんなに恥ずかしいことはない、わからないことは何でもすぐに聞く。聞けばすぐわかる。わかるまで質問する。しつこい男だなと思ったかもしれませんけれども、そのおかげでわずか十数日間の勉強会ですっかりロータリーを理解できたのです。ありがたいと思っています。

本当に人の話というのはためになるのでありまして、今もアトラクションではなくて心と心のふれあいで2,000人で話し合ったとのこと、あと10日早く聞いていれば「白浪五人男」をやめてそっちをやったのですよ。今、言われても間に合わない。もう今日の明日ではどうにもならない。

パネリスト　南園義一

アトラクションの中からも、また心を引っ張り出すのですよ。だから、いいのですよ。ちょっと言い過ぎましてごめんなさい。

コーディネーター　高橋福八

いや、そんなことないのですよ。そういうことであれば明日引っ張り出すようにします。

ガバナーになりますとシカゴへ行くのです。シカゴからちょっと行くとエバンストンという小さな湖の田舎町がありまして、そこにロータリーの本部があるのです。エバンストンの本部の２階に上がったら日本人みたいな人の写真があるのですね。見たことがある人だなと思って、よくそばに行って見たら田中作次さんなのです。これは2770地区、確か日本人では２人だったと思いますが、私は田中さんしか見えなかった。すごいなと思って聞きましたら、これは大金の浄財を財団に寄附をすると載るのだとのことです。そうやってロータリーに本当にほれ込んで基金を提供している田中さん。私はそういう意味でも実に偉い方だと思っています。

今、あの立派なお話をしていただいたお二人の先生でございますから、何かひとつ体験談を通してご指導をお願いします。紙の卸売業で大きくご商売を八潮でされております。どうぞよろしく。

パネリスト　田中作次

ガバナー、ありがとうございました。ただいまご紹介いただきました田中でございます。今日はデコさんと奥様、同期でありまして、いろいろな会合で、ちょこちょこお会いできるのですね。それでご指導いただいています。ありがとうございます。こちらの地区大会のユニークさ、そしていろいろな工夫をされた地区大会でびっくりしております。本当におめでとうございます。

また、こちらにいらっしゃるお二人はその後も私の方にいろいろな情報を下さり、ご指導をいただいている大先輩でありまして、しかも英語がペラペラです。私はちょこちょこなのですけれども。その前に時間が３時32分から始まりましたので、私は10分間ですから42分までということにしたいと思います。

私は集団就職した１人なのですよ。だから、家が貧しくて学校に行けない。高校も行けない。けれども、私の夢は世界を回ることだったのです。今のロータリーは国際ロータリー、よく合いますね。世界を回ることが夢、そのために無線をやっていたのですよ。そして、東京の学校を出て、船乗りになっていけば世界を回れるだろうと。単純だったのですね。飛行機があまり飛んでおりませんでしたから。そういうことで、東京に出て来て硝子工場で働きながら隅田川高等学校に４年間通ったのです。ところが、１年間仕事をしたところで残業が多くなって、私は勉強をしに来ているのだ、残業が多くなったら学校に遅れるではないかということで職場を変えたのです。それが田中文具店という文房具屋さんだったのです。

私はもともと阿部という苗字なのです。そしたら、１年後に私は養子にされてしまったのです。私は断ったのだけれども運命というのはわかりませんね。仕方なく、それではここで一生懸命仕事をしながら自分の夢をかなえたい。世界を回ることが夢ですから、あとは手段ですね。そういうことで変えました。そのときはおじいさんとおばあさんしかいないのですよ。あとは女中さんが１人。10坪ないくらいの小さい文房具屋さんです。家は借家です。ですから、財産ももらえるどころではないのです。しかも、おじいさんは保険が嫌いですから入っていません。だから、何ももらう当てはないのですけれども、そうなった。

そして、車も１台もない。リヤカーと自転車。そこから卸が始まりまして、そして10年後に、そのおじいさんが亡くなって、私の代になってから、ちり紙、トイレットペーパーで日本一の卸になりたいということでやったのです。思ってやっていけばすぐに１番になってしまうのですね。そのことはなったのだけれども、自分の夢を果たすことのために昭和42～３年ごろから飛行機で世界の各地に２～３回ずつ行きまして、今までに120回くらい行きました。その夢はとっくに終わってしまったのです。一つの夢が終われば次の夢とどんどんそれは上がっていきます。だから、頑張ればできるのだよということを自分にに言い聞かせながら若い人たちにも言っているのです。

隅田川高等学校を出てから、もちろん仕事もしながら夜と日曜日には日本経営大学院というのが新宿にあったのですけれども、そこに３年くらい通いました。そこが終わってから今度は東京経営大学院という所に夜と日曜日に、それもまた３年

くらい。そういうことをしながら、ほとんど青春というのはなかったわけですけれども、マーケティングの勉強をしたのですね。私は卸売業をやりますからマーケティングだけですね。本当に消費者のニーズというものを流通を通し、どのようにメーカーに反映するかということがテーマだったと思いました。

そんなことで、ロータリーに入る機会を得ました。これも神様が与えてくれたのでしょうか、本当にすばらしいロータリーに入り、そしてもともと人間は人のために何とかしたい、人のために役立ちたいという気持ちはみんな持っていると思うのです。ただ、どのようにして人の役に立つかというなかなかチャンスがない。その奉仕の機会を与えてくれたのがロータリーだと思いました。36歳でロータリーに入り、これは商工会会長に無理やり誘われて、入りたくなかったけれども入ったのです。そして、3年から4年の間は全くロータリーの関心はありません。ただ出席して委員会にいるだけ。おもしろいということを感じたことはありません。

ところが、5年目に会長をやることになりました。それもメーンで最初からあなたが会長だよということではないのですね。誰かの補欠ですね。誰かが駄目になってなった。その次の分区代理のときも誰かが駄目になってなった。その次のガバナーも誰かがうまくいかなくてなった。全部私は補欠人生です。これほどすばらしいことはありません。いつも本命ではないのです。それを、今、卑下しているわけではありません。だから、ロータリー財団地域コーディネーターをやったのですが、ＲＲＣというのですが、このときも紫野さんが決まっていたのです。ところが、奥様が具合が悪くて入院された。そこでできないということで私のところに回ってきたのです。これも補欠です。

その後、現在やっている指導力養成研修委員会というのがあるのですね。これは毎年シカゴに行って研修委員会の会議をやるのですよ。どのように教育するか。ガバナー、ガバナーエレクト、あるいはクラブ会長、そういうことを検討する委員会です。これも紫野さんが理事にノミネートされた。だから、もうやれないから私ということで私に回ってきたのですよ。だから、本当に不思議なことが多いのです。

時間があと4分半しかないから本題に入りますが、私は三つのことを言いたいのです。それはＡＢＣです。ロータリーで学んだことの一つは積極性、アグレッシヴ。それから、Ｂはベイシック、基本。基本の中身の最大の要因は感謝です。感謝があるからこそ奉仕があり、我々は学び、そして自分の自己啓発を図りながら世の中に尽くす度合いを高めることができる。三つ目はコンティニューです。継続です。継続ということは、ロータリーは辞めない方がいいですよということがまず一つですね。これは辞めた方々からいろいろ意見を聞きますと後悔している、2度目に入りたいけれども、もう7年たってこれから入っても全部私は一番ビリになってしまう。自分たちの後輩がもう上に上がってしまってみっともない。だから、転勤をすればいいではないかと。遠い所に行って入ればわかりませんよ、そこへ行ったらいいではないかと言うのです。そういう方は結構いますよ。だから、違うクラブに入ってもらえばいいと思うのですね。近くだと都合が悪かったらどこでもいいですよ。

でも、パストＲＩ会長は辞めて、それからまた入ってＲＩ会長にもなれるのですから、辞めた方をもう1回誘うという運動も展開すべきだと思います。アグレッシヴの中で特に言いたいことは他人が何かしてくれるというのを待っているのではなくて自分から進んで何かをやろうというふうに変えていくことだと思うのですね。そのことはポール・ハリスの言葉の中にも載っております。いろいろありますが時間がないからこれはまた後にします。

ロータリーの難しい用語とか言葉というのはこれはわかりませんから、わからないたびに先輩に聞く。先輩がわからなかったら先輩は調べてくれますから2人の方が学べるわけですよ。本人も学べる、先輩も学べる。大体記憶というのは教わって人に教えてあげたときに覚えるわけです。何かそういう場がなかったら、なかなか右から左へ行ってしまいますね。その繰り返しが重要だと思っております。聞くは一時の恥と先ほどどなたかが言われましたけれども、聞かなければわかりません。

もう一つは好奇心。ロータリーの例会では昔を思い出すような歌を歌いますね。やはり子供のころに戻る気持ち、それは私は別の意味で好奇心をもう一度大人になってからでも呼び起こそうというふうに自分で変わりました。ですから、単純なことでもこれはおかしいと思うことは、すぐ書いて調べたり、あるいはただで聞けるところは新聞社です。新聞社に電話して聞きます。それから、税金を払っているのですから外務省・大蔵省・通産省、これは電話料だけかかりますけれども、ただです。丁寧に最近は教えてくれます。税金を払っているのですから、ありとあらゆる日本のそういう機関を活用することが大事だと思います。それで、相手の言い方が悪かったら、あなたのお名前を教えてくれますかと言いますね。そうして後で文句を言われると、まずいことになるから、そう言われないように、利口ですからちゃんとやってくれます。そういうふうに思いました。

どのようなロータリークラブでも、よいところと多少問題のあるところとありますね。人間はみんな持っています。ところが、自分もそういうところを持っていながら、人のことだけ欠点を言うことはよくないと思います。やはりそこでは寛容という言葉をさっき言われましたけれども、人をどのように許すか。そして、何かどんどん文句を言っていくときでも出口をつくってあげるということを学びました。もうこれ以上だめを押して絶対出口がないようにしたら、いつ刺されるかわかりません。今の若い子供たちは特にそうです。だから、強く言ってもいいけれども、どこか出口をつくる。

また、自分たちもこのような場であまりがんがん強硬に言っても出口がなくなったら困るから、少しはずるいようだけれども出口もつくっておく方がいいのではないかと思いました。今ちょうど15秒前ですから、ひとまずこれで終わります。ありがとうございました。

コーディネーター　高橋福八

やはり苦労していらっしゃるから言うことが違います。大したものだと思うのですけれども、田中さん、アルゼンチンの壇上ですごいスピーチを英語でなさいましたよね。ああいう英語をどこで覚えるのですか。

パネリスト　田中作次

今2人の方が英語がうまいと言いましたよね。私の場合は、私がグループディスカッションのリーダー、先生方はアナハイムにエレクトで行ったのですね。そうしますと、1週間勉強しますね。その前の1週間は勉強を英語で習うわけですよ。私は英語ができないのに英語で習うということは不可能ですね。だから、こんな厚い本が来ます。それが来たときは事前に全部読んで自分が生徒になります。それで、その練習というのは質問のところに全部答えを三つ英語で書いておいたのです。行ったときはこのことについてどう思いますかと言われたら一番先に手を挙げるのは私なのです。なぜかと言ったら、ほかの人が言ってしまったらもう答えはないのですから。だから、「ミスター・タナカ」と言われてそれを言いました。ところが、私を指してくれなくて4人目に来たとき、そのときは「先ほどの方と同じです。」と言うのですよ。だから、要領がいいというのは積極的に自分が答えをつくってありますから問題がないのです。

ただ、人に先生になって教えるときは困りました。みんな外国人ですから英語しか通じません。私は日本語で質問するわけにはいきません。ところが、私はマニュアルに沿って英語で言っているのですけれども、その人は逆質問を私にするのですね。聞かれたって言っていることが私にはわからないのですね。それは困るとも言えません。言ったってわかりませんから。だから、このことについてあなたはどう思いますかと英語で言うのですよ。ほかの人に答えさせるのですよ。そうしたら、その2人が今度はディスカッションに入ってしまった。時間がないからやめてください、次に進みますと言って、本当に苦しい思いもしましたけれども、それから帰ってきましてから、英語を勉強しなくてはこれからはだめだということでベ

ルリッツに帰ってからすぐ2日後に行きました。何とか私を1年間で英語ができるようにということでお願いしました。そして、勉強したのですが、何しろ年をとっている。生徒たちを見たらみんな若い人ばかりで私が一番年上です。やったけれども1年間でできなかったのです。1年間で大体2～3カ月間は行けません。私は外国に行ったり、一昨年は7回外国に行きました。今までまだ続いているのです。これは今3年半くらいです。だけれども、まだ覚えられないです。ただ、外国で生活するくらいのことはできますけれども、演説をするとか、そういうことはできません。そういうわけです。

コーディネーター　高橋福八

今の日本語よりうまく英語でやったのですよ。それも8,000人の前でです。考えられますか。こんな小さな会場ではなくてすごい体育館みたいな会場で8,000人の前で堂々と随分長くやっていましたよね。演説を英語でやって、私はびっくりしてどこの学者なのかと思っていましたらご商売をやっている方だということで、感心してしまいました。本当にすばらしいと思います。

それともう一つ聞いてよろしいでしょうか。エバンストンのロータリー本部に写真が載るくらいの高額寄附をされたとのことですが。

パネリスト　田中作次

アジアでは冠名奨学基金というのがなかったのですね。要するに15万ドルですよ。私がガバナーになる前に当地区の川口の田中徳兵衛さんにお願いしました。「やってくれ、やってくれ」と。何回も断られましたけれども、「ではどうすればやってくれますか」と言ったら、「あなたがやるならやってあげましょう」ということで、アジアで初めて15万ドルを出してくれました。私は2番目に出しました。そこから始まったのです。あさひ銀行の八潮支店に聞けばわかりますけれども、お金がありませんから借入金ですよ。借金をして、そして免税にはなりません。今はなっていますけれども、教育的プログラムは当時免税になりませんでした。

だから、寄附というのはお金があってするよりもない方ができるのではないか。ある者は放すというのはつらいですね。

コーディネーター　高橋福八

今日見えている方はみんな借金などしなくても回っていく方ばかりですから、ちょっと寄附しにくいですね。でも、なるほど借金をすれば寄附ができるのですね。いいことを聞きました。びっくり仰天です。

南園さんと岡本さんは、もちろん先生なのですけれども、奥様は、私の女房とか、今日ここにいらっしゃるガバナーの奥様方をご指導下さいました。ちょっとご起立願えますか。このお二人がリーダーなのです。大変お世話になりました。女房に聞きましたら、とても親切によく教えて下さったと申しておりました。田中さんから先ほどあなたの奥さんを紹介していないじゃないかと言われました。私も空気みたいなものですから、いてもいなくても気にならなかったものですから紹介しませんでした。ちょっと起立してください。これがうちの女房でございます。どうぞよろしくお願いします。

岡本さんは我々と違って大きなご商売をなさっていますけれども、ロータリーとのかかわり合いがよくわかりました。そのご商売を通して何かお話し漏れがございましたらお願い致します。

パネリスト　岡本德彌

私は真面目ですから、そのとおり聞きますと言い残したことというのはいっぱいあるわけですけれども、ここで宣伝するわけにはいきませんし、ロータリーに入って、何しろ私の場合は、さっきも言いましたように新しい所へ行って全く知らない地域へ落下傘のように降りていった。それで、地域に密着するためには、いわゆる支店経営ではなくて別会社にして、会社の株式の40%くらいのものを地元の方や企業や、それこそロータリアンに持っていただいた。そういうことで現地の人間になりきる、そういう考え方でありましたし、地元がよくならなければ自分の企業はよくならない、これが一つのフィロソフィーでありました。

それから、私のところは明治5年から呉服屋をやって、当時からの教えに1円のお客さんと10円のお客さんがある。例えば呉服屋さんですから、いわゆる高級の呉服を買っていただくお客様がある。それと同時にさらしを買いにみえた1円のお客様がいらっしゃる。その1円のお客さんはどちらかと言うと呉服屋に来て引け目を感じておられるだろう。10円、20円、100円の物を買うお客さんは非常にいい気持ちでいらっしゃるだろう。商売の秘訣はその1円の物を買っていただくお客様に本当に心から感謝を続けろと。これを我々は一つのスピリットとして百十何年やってきたわけでございまして、いろいろ危機もありましたけれども、それを乗り越えてきた。

これはロータリーも全く同じだと思います。地域のお役に立つように、人様の幸せに役立つように、私どもは生活文化、衣食住、遊びと教養と知識、芸術、そういうものを商いとさせていただいているわけでございまして、ロータリーの気持ちと全く同じだ、これでやっておけば間違いないというふうに私は思っております。

先ほどちょっとしゃべり過ぎまして申しわけありませんでした。

コーディネーター　高橋福八

私も明日そんなことを話そうかと思っていました。商売・仏教・ロータリーは全くイコールですから、そういう意味ではご商売を真面目にやっている方はロータリーにはすんなり入れるというのが私の実感でございます。司馬遼太郎の「尻啖え孫市」をぜひ読んでください。孫市はすごくいい男ですよ。先祖の方、おじいさんではないですよ。何百年も前のおじいさんですけれども、この男はすごい。やはりああいう男がいるというのは私たち日本人としては頼もしいですね。権力に盾ついて絶対一歩も引かないという、私はああいうのが好きなのですよ。岡本さんはそういう気骨が何か孫市さんに似ているような気がしましてね。本当にすばらしいと思います。

南園さんはお医者さんですけれども、どうもロータリーはお医者さんが多いですね。商人が少なくなってしまって本当に疲弊してしまったわけであります。そういう中で、岡本さん又田中さんが商業代表でやっていらっしゃるのですが、先生はお医者さんの立場でロータリーをどういうふうに見ていらっしゃるか、一言お願いします。

パネリスト　南園義一

今、岡本さんが言われましたけれども、同じことだと思います。医療もすべてどういう仕事でも、どういう職業でも根本は同じだという気がします。というのは、誠意を持って相手に接する。そして、相手の身になって考えてあげるということができれば、その結果は、より良きものがまた返ってくる。自分が欲するのではないですよ。返ってくるのだという、その良さというものはロータリーの中でも非常に大きな精神だと思っています。ですから、医者でもそうですけれども、患者さんのために一生懸命やりますよね。本当によかれと思ってやるのですけれども、結果が悪い場合もありますし、あるいはいろいろなことを言われる場合もありますけれども、大方の方は自分の命を助けていただいたという気持ちで本当に感謝をされますよ。ですから、どの仕事でも同じです。相手の身になって考えるということができれば大丈夫かなという気持ちを持っております。

例えば、さっき私は友愛という言葉を使いましたけれども、親友と友達とは違うと思うのです。要するに、心を開いて相手の身になって、例えば悪いことなども言い合いながら過ごせるのが親友ですよね。しかも、結果的には相手の身を思って物を言っているわけです。相手の親友の身になって物を言っているわけです。だから、そういう気持ちでいれば私はどういう職業でも同じことに到達するだろうという気持ちでおりますし、それがロータリーのいわゆるシェルドンの考え方ではないのかなという気持ちでおります。

コーディネーター　高橋福八

非常に重要なことだと思います。やはり友達よりも親友、親友は本音で話し合える。きれい事を言っている間はまだ友達の範囲内で本当の親友にはなれないのではないかと思います。形式的なことではなくて、本気で自分の考えをぶつける。喧

嘩してもいいからそこで議論する。そして合意に達したら、それから先が親友になるということでしょうね。お医者さんも商人も、その心は全く変わらないと私もそう思っておりますが、今、先生のおっしゃるとおりだと思います。

田中さんは先ほど申し上げましたとおり英語がペラペラで、なぜあんなにうまいのだろうと思うほどなのですけれども、努力家でありまして努力家から見てご商売をそこまで大きくなさった、ロータリーがどういうところに自分の人生にプラスになったか、ちょっとお聞きしたいのです。

パネリスト　田中作次

先ほどＡＢＣのＢのところで感謝と言いました。これはまず私の人生の目的は何かと言うと、それは感謝と関係あるのです。それは、簡単に言うと他人や社会のために尽くすことと言われていますね。そして、いろいろな宗教でも書いてあるとおり、ほかの人のしてほしいことを少しでも多くしようではないか。そして、他人のしてほしくないことをできるだけしないように努力し続けることが人の道である。こう思っています。

そして、多くの人々や社会や自然環境からの恩恵によって、さらに先人たちのおかげで健康で豊かな生活ができるようになってきていることも事実であります。これらのご恩に対しての感謝の気持ちを永遠に持ち続けること、そしてそれを行動に移すこと、別の表現で言うならば、お返しをしながら、さらに住みやすい世界・社会をつくっていくために一人一人が職業生活や社会生活を通して役立っていく。これが基本だと思うのです。

そのために私たちはロータリーの奉仕の理想という、これはロータリーの心と言ってもいいと思うのですね。これは思いやりの心を持って他人や社会のために役立とうという基本、これを仕事だからお客さんのためにやろう、そうでない普通の社会生活のときには関係ないということではないのです。私は個人生活、社会生活、あるいは職業生活、これはプロフェッショナルです。お客さんは大事だからお客さんのことは大事にするけれども、その他の社会生活においても自分以外のことは同じように大切に行動していくことが人間の行き方だと思うのです。

そして、世の中が良くなるということは、社会があって人が住むのではないですね。一人一人がよりよくしようという人を一人でも増やしながら社会をより良くしていくのです。ここが逆だと思いますね。

コーディネーター　高橋福八

この思いやりの心がロータリーの心なのですね。まさにロータリーの真髄を語っていらっしゃると思います。これは番外で、こんなことは予定していなかったのですが、私だけ質問してももったいないのであと５分ございますから、何かこれはどうしてもお聞きしたいということがございましたら挙手をお願いします。どなたでも結構です。みんな感銘して質問どころではないという感じですね。

それでは、最後に１～２分ずつ岡本さんから順番に何かいいサジェスチョンがございましたらお願いします。

パネリスト　岡本徳彌

先ほどいろいろ申し上げましたけれども、これからのことを考えますと、ロータリーは、もう私から言うほどのこともないのですけれども、人間の集団でございまして、人間の集団である以上、それは社会との絡みであり社会的な存在である。また、歴史的な存在である。こういうふうに思います。ですから、社会はどんどん成長し変化してまいります。また、その変化をさせるのも人間でありますし、それによって影響を受けるのも人間だと思います。これは会社においても毎日毎日が変化でございまして、その変化がどこから来てどこへ行くのだろうか。それに対してどうやって対応するのだろうか。それでなければ会社はうまく回りません。その変化に挑戦していくということがロータリーにおいても必要だと思いますし、私

から申し上げることもないのですが、倫理性という問題が一つあると思います。

ロータリーの綱領を見ましても非常に職業の倫理性ということを強調しております。例えばバブルのとき、ロータリアンでありました著名な大企業の経営者の方々がいろいろ問題に引っかかったり問題が起こったりしたことがございます。ああいうのを見ると誠に残念でございますが、それはさておきまして、真面目に自分の事業をコツコツとバブルに惑わされずにやった方々が圧倒的に多いわけでございます。私などもいろいろそういうことがありましたけれども、一切受け付けないで自分の仕事オンリーで、しかも着実にやってまいりました。

私どもの仕事は繁華街に土地をたくさん持っております。「土地が値上がりしていいですね」と言われたけれども、私は全く逆に考えました。土地が値上がりしてしまったらもう仕事はできない。坪当たり50万円か100万円だった地所が1,000万円になったら、そこにビルをつくってお店をつくっての商売は成り立たない。私は亡くなった兄ともう我々の仕事は終わりだね。どうしたらいいのだろう。千数百人の従業員を抱えていて、これから将来が真っ暗だ、弱ったものだ。そういうふうに考えておりまして、言葉が悪いのですけれどもバブルがおさまって商業地の値段が下がってきた。これならチャンスがあるかもしれない。こんなふうに逆に考えたわけでございます。ですから、実利を負う、浮利を負わない。これを私どもの一つの鉄則にしております。

以上でございます。

コーディネーター　高橋福八

ありがとうございました。「長続きをする企業は浮利を追わず」ということで、これは住友の家訓でもありますよね。ありがとうございました。

それでは、１分程度ずつひとつお二人の先生にお願いします。

パネリスト　南園義一

最後にちょっとお願いをしておきたいのは、我々は上も下もない一ロータリアンだということをぜひみんなでもう一遍再認識し合おうと思うのです。特に国際ロータリーはあんなことを言ってとかおっしゃいますけれども、みんなが一体になって考えていくという姿勢を持って、そして我々がロータリーをつくり上げていくのだという気持ちで、そして素直に話し合っていくということが大事です。私はもう40年間病院で共同経営をやっています。自分の考え方を固守してはだめなのです。相手の身になって、お互いの考え方をいい意味で循環していくことによって経営はよりよき目標を見出していきます。

ですから、もめ事一つなく私は40年間病院を経営しております。それは今でも続いております。ロータリーも同じです。ロータリーは我々のものなのです。我々がつくっていくのだということを最後にお願いをしておきます。

コーディネーター　高橋福八

ありがとうございました。誰がつくるのでもない。私たちみんながつくるのだという、もっともですけれども誰も気がつかないことでございます。

それでは、田中先生お願いします。

パネリスト　田中作次

できない理由を探すよりできる方法を考えよう。これはロータリーから教わりました。それから、例会においては最低一つ、何でもいいから何かゲットして帰ろう。これは目標として最低でも実践してほしいことであります。最後に、「意識を喚起し　進んで行動を」というのはアクション、今スタートする、何かやろうと思ったら一歩出ない限りいつまでもだめです。一歩出ることが大事です。終わります。

コーディネーター　高橋福八

ありがとうございました。短い時間ではございましたけれども、ロータリーの真髄に触れたような気がいたします。お聞きいただいた皆様方も多分思い当たることがあり、これから考えを変えようではないかと思った方も大勢いらっしゃったのではないかと思います。私が思っていたとおり、すばらしいパネルディスカッションになりました。ありがとうございました。３人の先生に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。